昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和二十九年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第六四号）

目次

近角常音先生御法話……（1）
よきひとの仰せの極み……花田正夫……（6）
法藏菩薩の勝行……福島政雄……（9）

慈光

第六巻　第七號

近角常音先生御法話

〔前述〕來る八月六日は先生の御一週忌に相当り、追慕の情、まことに切にして新なるものがあります。この時に、昭和二十四年秋、滋賀県愛知郡稲村の善照寺で、故・那須野一乗法師（弘誓寺先住）の御一統を中心とされ、兼ねて一般信徒の方々に御法話下さいました時の筆録を掲げて慈恩を仰ぎまゐらすよすがとせて頂きました。

文責筆者　花　田　記

私は竹生島の近くの寺に生れたのでありますが、兄が学生時代、丁度東大の二年生の頃、世の中のことで苦しみ、心のやり場がなくなり、気違ひ同様になやみ、はからずも幼少の頃から聞いた佛の本願念佛に安んじ、やつとその御本意にもとづかせて頂き、これ一つの忝さに、一代の間佛の広大な御真実一つでやらせて頂いた。

兄がさうであるので、私も自然に感化を受けたが佛の御慈悲がわからず、二十年してやつと有り難いことを知らせて頂き、一代かうしてやらせて頂いてゐる。

御当地の弘誓寺様は、兄のよろこびに気付かれて、熱心に道を求められ、有り難い生活をして居られましたが、兄が八年前死にまして以來、春秋二回私が郷里の寺に帰ります度に御いでになつて私の話を聞いて下さいましたが、実は私と違つて弘誓寺様は、心の細やかな人で、私の方が却つて導きを受けてゐた。その弘誓寺様の御縁で御一統の皆様方が御法を求められるやうになつてこちらに寄せて頂くやうになつた。これはまことに有り難い御縁とよろこんでゐる。

私は平素、東京の本郷森川町の東大正門前の会館で毎日曜話をさせて貰つてゐるが、これも兄が始めましてから、最早四・五十年になると思ふ。その一方学舎の方で二十五・六人の学生が居りまして、お世話をしてゐるが、この学舎にはいる学生は、佛の御眞実を聞きたいと希望する方々のみを入れてゐるが、寺院出身の者は、はいつては貰はないことにしてゐる。それは兄が自分の経験から寺に生れた者は小さい時から佛に馴れきつてゐて、その為自分が聞きにくかつたから、学舎には在俗の方に聞いて貰ふことにしてゐる。学生には禅宗、基督教、無宗教などの家庭の方もあるが、何処までも御見捨てない、佛の御真実、南無阿彌陀佛以外には、私共の救はれる道はないから、これを宗派を超えて聞いて貰つてゐる。

学舎を出られた方々で夫々に各方面に活動して貰つてゐるが、その人々が「お見捨てのない御眞実の一道」を聞いてゐて下さることだけでもよいと思つてゐる。滋賀県の参議員村上義一君も、中学生時代病気をしたのがもとで、心淋しくなり、信仰之餘瀝などを読み、非常に驚いてゐたが、大学に入ると学舎にはいつた一人であるが、いまもなほ信仰を大切に思ひ、時々会館にも訪ねてくれるので色々の問題について相談にのつてゐる。

兄は十五年前に発病して脳溢血とて手足も不自由となり十年も病床生活を続けて八年前に死にました。私はこの兄の影響で色々と聞いたが仲々わかり難い。話の筋道はよくわかるが、頂き処がむつかしい。これで苦労してゐる人々が多いと思ふので、そこを話して見たいと思ふ。

然し四・五日前から無理をしてゐる上に昨日妻が病気したので徹夜をし、末の娘が稲枝駅まで送つて呉れたやうな始末で、昨夜十時頃に、やつと着きましたので、頭もボンヤリしてゐて十分の話が出來ぬことと思ふ。元來私はドモドモした話しか出來ないので、話の途中でも質問があつたらきいて下さい、又話のあとでも自由にたづねて下さい。

さて「どこが有り難いのか」といふことからお話しようそれには兄の話から、先づ聞いて貰ひ度い。

先刻申した様に、私は竹生島の向ふで生れたのですが、兄と私の二人兄弟です。兄は子供の頃から小心者で、それだけに正直者であつた。十五歳の時、京都の本願寺の学校に入り、他力信仰のことは学校で一應聞いた。眞宗信仰の型は、今生で南無阿彌陀佛の有り難い事を聞かせて貰ひ、生命終ると、淨土に生れさせて頂くといふことにある。

ところが兄は、それに相違はないのであるが、老人の方ではそれで満足というてゐる方もあるが、若い兄はそれで満足が出來ぬ。生命が終つて淨土に生れさせて頂くのも結構であるが、同じことなら生きてゐる間に佛法を聞かぬ世間とは何処か、違つた眞実の道を辿らせて貰はねばならぬと考へた。

眞宗信者を批判する時、これはよくある問題だ、悪人正機だから、かかる者目当の救ひであるから悪うてもよい、念佛させて貰ふのだと云ふ人が多い。

年少ながら兄は考へた。世間では、自分は正しい、他人が悪いといふ、よしあしの問題ばかりである。そして争つてばかりゐる。佛法を聞かぬ者ならそれも仕方がないが、佛法を聞いた者が「よいの、わるいの」だけではよろしく

ない、何処か変るところが出來なければならぬ。
　歎異抄の中に「念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとなれば信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし云々」とあるが、魔界即ち悪魔とはどういふことか、それが障碍せぬとはどうなるのかといへば、悪魔の全体を見て何処までも可哀想だと、最後の最後までお見捨てない御眞実で向うて下さると悪魔も遂に頭を下げてしまふ。ああならねばいけぬ、かうならねば悪いとだけ云ふのでは、いくらよくなれと云はれてもよくなれないのだと子供でも反抗するが、何処までもお見捨てない御真実であれば、遂に頭が下つてしまふ。
　喧嘩をすることはよくないと知つてゐても、持つて生れた性だからやめられない。そこを見てとつて下さる、よくないところを一つも退けずに見て下さる御真実である、吾々は信心が無ければ佛は捨てゝると思ふが、頂かう、信じようとしても頂けないのが本性だと、何処までも御見捨てない、お呆れのない御真実一つが有り難いとなる。茲に魔界外道も障碍出來なくなり、向ふが頭を下げてしまふのである。
　そこで兄は、初め佛の御心のやうに他人をだけ悪く思ふまいと、人間のくせをしながら、佛の真似をし始め、それをやらねばならぬとなつた。かかる身の程を知らぬことを考へ乍らも、やらぬ前にはさうと思へないでやり始めるものだ。出來ないのは努力が足らぬとなつて行くのが人間である。そこで他人はひどい事をする人もあるが、自分は念佛の上から辛抱するのだとなつた。ところが、どんなに我慢してもそれが出來ぬ、出來ないが、これは自分の努力が足らねのだとなつていつた。
　世間修養の上で、あれもこれもと修養するが、二つより三つ、三つより五つ、十、二十と努めてゆくうちに、遂に自分は我慢の仕通しとなつてどうにもならなくなる。遂に爆発して大不満足となつてしまつた。世間には色々の人がある、自分に都合のよい人ばかりではない、善悪寄り集つてゐるのであるから、こちらの方が満足すべきものを一つ頂いておればよいが、それがなかつたから、兄は遂に行き詰つてしまつた。
　戰争中でも、滅私奉公を誓つてみんなやつたが、その心を上からみとめられぬと、遂にボロが出てしまふ、ほんたうの滅私奉公ならそんな筈はないが、実際はそれが出來ぬ。終戰の今日でも、自分は正直にしてゐるが、他人は悪いことをして平気でゐる、自分は正直をして損ばかりしてゐると思ふやうになり、遂に初めの正直は崩れてしまふ、始めは我慢してゐるが、自分が我慢してゐるのに他人はひどいとなる。

兄も初めは佛様気取でやつてゐるうちに、自分はよい他は悪いとなつて、自分も亦悪魔のやうになつてしまつた。そこで兄は考へた「人間は自分が正しいことをしてゐると考へてゐるぐらゐひどいことはない。そのために他人はけしからぬとなつてしまふのだから」と、よく後になつて言つた。又「世間によく修養とか、向上とか、努力の話を聞かされてゐるが、本気になつて修養努力したものに限つて、遂に他が悪い他が悪いとなつてしまふのが落ちだ、そこが佛法の話と違つたところだ」とも言つた。
　日本は戰前に、支那はけしからぬ、米英はけしからぬであつたが、向ふからは日本がけしからぬであつた。
　兄は初め念佛者として他人を悪く思ふまいとして、遂に自分はよいとなり、他を悪いと思ふやうになつた。これが佛教で言ふ流転輪廻である。
　それでは自分がよいと思ふから他人が悪いとなるのだから、自分がよいと思へぬやうにしたいと思つたが、一つよいことをすれば、それがよいとなり、二つよいことをすればまたそれがよいとなるので、そのよいと思ふことをやめること、消すことは出來ない。さうなると困つた〳〵となり、初め佛様が有り難くてやつたことが、遂に有り難い佛様も消えて、自分が悪いとなつてしまつた。他人が自分を悪いと云うたのも無理はないと思へて來て益々こまつた。南無阿彌陀佛は有り難いとなつて出発して不満足となり、遂に南無阿彌陀佛も有り難くなくなつてしまうた。
　そこで兄は半年程学校へも出られなくなり、よくしたいよくしたいとつとめたがどうにもならず、東京に居ることも出來なくなつた。友達がよくして呉れると自分は悪いのに友達はよくして呉れるとなつて苦しみ、遂に寺に帰つて來た。然し寺に帰つても、親が貧しい寺に居て借金までして学資金を出してゐるのに、自分は神経衰弱のやうになり駄目になつてしまうたのであるから、親にもすまぬと思ひ、よい子となれ、立派になれと朝夕念じつづけて呉れた親に、この有様は何事ぞとなり、自分で親の心をへだててゐるのであるがら、切角温い親に会ひながら安心は出來ず、かへつて苦しい〳〵となつてしまうた。このことは『宗教的同朋』の題で兄が告白してゐる。
　自分が人を咎めまいとして遂に自分はよい、人は悪いとなり、責めない事を目的とした自分が責める結果となり、善悪のけじめもなく吠えつき嚙みつくやうになつた。だから佛様にも吠えついて行く外はない、佛様にもゲンコツを挙げて叩きつけるのであるが、この私共をたつた一人でも「それは無理からぬ事だから、お前を悪いとは思はぬ」と狂犬を何処までも捨てぬとなると、頭を下げてしまふのだが、さういふ人が一人もない。

よくならなければ佛も捨てる！　しかしよくなれない、これでは困つた〳〵となるばかりだ。苦しい時は何でもよい、ただこのよくなれないところを見てとつて、何処までも捨て給はぬ人はないか！　何処かにないか！とたづね求めた。

私共は、宗教ではよくならねばならぬ、と、あやまり考へてゐる。この心が去らぬ、いつそ死を考へたが闇いままで死んでは、何時までも闇である。さうかうしてゐるうちに病気になり、長浜病院に入院したが、病気が恢復して車で帰る途中に初めて、その方が佛様であると気づいた。

南無阿彌陀佛のお慈悲を聞いて、こちらからよくせねばならぬと思つてゐたが、それが出來ないところを見られて、人間にはない広大な御真実の御心を以て、何処までもお見捨てない御真実が佛様であつた。十劫の昔から、これを云うて下さるのだと薄すら気付かせて頂いた、そこで気違ひ同様のものが安心させて頂いた。

この世で、何処までも可哀想だ！と云うて下さるのが世の光である。国と国とでも、家の中でも、よしあしでは光はないが、よくなれないところを見て、可哀想だと云うて下さること、これ一つが世のあかるみである。

どんなことがあつても、聖人の教をのけて真実なものが何処にあらうか。信じられぬ私を、佛の方から信じこまれた、佛の広大な御真実、これ程有り難いことがあらうか。して見やうのない我々の性分を見てとつて下さつた御慈悲の御真実を、聖人はただ念佛してよろこばれたのである。人間に見て貰ふところのない、そこを見て取つて下さる御真実故に有り難い。

御文章に「もろもろの雑行雑修、自力のこころをふりすてて、一心に阿彌陀如來、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのむ」とあるが、これは佛が一心にこちらに向いて下さる。横ばかり向いてゐる我々を、気の多い奴を、一心に佛が思うて下さる、佛がそれ程までに思うて下さるのだ、この御心がとどく時「たのむ一念」となるのである。

だから我々の一生は仕様のないところを哀んで下さり、何処々々までも力になつて下さる広大な御真実以外にはやすらぐところはない。親兄弟を始めとし親戚も友人も人間ばかりしかない世の中に、可哀想と見て下さるのである。

この世に処して、自分の駄目なにつけて、佛の御真実のみが有り難いといふことを兄は一生話してきた。私如き変人が六十七才の今日まで、兄の御蔭で生きさせて貰うてゐる。

よきひとの仰せの極み

花田正夫

歎異鈔の第二條に、関東から生命がけで、京都の聖人をおたづねして、往生淨土の道ひとつをおききした時

『親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし、と、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり』

と、一期一会、再会を期し難い人々を前に、老聖人が、詮じつめた教のかなめ、信仰のきはみをもつてお答へ下さつて居ります。

さうでありますから、この一節には『これだけ聞いて貰つておけば、切角御縁深うして地上で会へた本当の目的が果たせる、ここひとつを聞いて貰ひたいのが自分の中心の願ひである』といふ聖人の心意気を感じるのであります。

親鸞におきては

聖人は関東の同朋にむかはれて、御自らの道を述べられたのであります。その初端が『親鸞におきては』との名告りであります。往生はひとりしのぎであると蓮如上人も申されて居りますが、信仰上のギリギリのところを言ふとなれば、自己を語るといふことに自然になるのであります。

さて『親鸞におきては』と名告り出て下さる聖人は『煩悩具足のわれ等は、いづれの行にても、生死を離るることあるべからざる』者、したがつて『地獄は一定すみかぞかし』と信知せられる聖人であります。斯様に地の底、海の底、岩磐、地殻といふところに心の根をおろされて、そこから『親鸞におきては』と名告り出られる聖人は、流罪であれ、死罪であれ、一家離別であれ、親子義絶であれ、一切の罪障によつては微動だにされない聖人であります。同時にまた、一切罪業の私共に『同じこころにてありけり』と同座して下さる聖人であります。

丁度十数年前のことでありました。私が肺疾のために一年余り病床についてゐた頃、池山先生筆の『親鸞におきてはただ念佛して』の軸物を常に枕頭の床に掛けて居りました時、病中色々な問題を縁としておこる病悩病苦の一切が

『親鸞においては』の一句に吸ひ取られては念佛と融けて行きました。そしてこの一句を、よろづの河川をそのまま受け容れる大海とも、また八風吹けども動かぬ天辺の月とも、はた、私の全身心を攝取して下さる広大な慈悲の御手なりとも、深く感じ始めました。

ただ念佛して

聖人が『信ずるほかに別の子細なきなり』と随喜信順される、よき人の仰せのきはみは『ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし』の一句であります。

近角先生は、池山先生著の『意訳歎異鈔』の跋文に、この一句を『親鸞自身は、お慈悲の念佛ばかりで、阿彌陀佛がお助け下さるぞよ、との善知識の仰せを承つて、そのまま信じいただくほかに何にもない』と達意的な意訳をして下さり、ともすれば、念佛申す力でたすからうとする自力念佛にとり易い点を、他力廻向の大悲の念佛であると、明瞭にして下さつて居ります。

『お悲慈の念佛ばかりで、阿彌陀佛がお助け下さる』

何といふ簡結明瞭な仰せでありませうか。この仰せを信ずるか疑ふかが、信仰の分水嶺であります。この問題に舊信仰とか新信仰とかいふことはないので千年萬年かはらぬ問題であり、また常に新らしい問題であります。

池山先生は四十二歳の時、この歎異鈔の金言にグット引入せられて念佛の人と転ぜられたので、生涯を通じて、『ただ念佛して』『池山においては、ただ念佛云々』と、常時不斷に繰り返され、御臨終が近づき、言葉ももつれると云ふ風になられた時にも『可愛さうに、南無阿彌陀佛』と言ひ遺されたのであります。

先生の著書『佛と人』には『ただ念佛』といふ言葉は、聖人のよき人の仰せにきいたきはみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのてでもあると道味されて居ります。

更に同書の中に、一心正念にして直ちに來れ、と、ただ念佛して、とを対比せられて、『た』は『一心』であり、『だ』とは『正念』であり、『念佛』が『直來』である。『ただ念佛』がそのまんま『一心正念直來』であると感得して居られます。この御感動は著しかつたので『親鸞においてはただ念佛して』の軸物と同様に『一心正念直來』は何十枚も書寫され、表裝までせられて、有緣の者に惠施して下さいました。

なほ『一心正念直來』を『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』と仮名書せられて、『ただ念佛』のこころを道味して下さいました。

曉、ひそかに仰ぎまゐらせば、よき人々の仰せは、天地

六合に満ちて『ただ念佛して彌陀佛のおたすけにあづかれ』と、遠い昔から叫びつづけ給ひ、また人の子のあらう限り、そこにこの悲心が迸るのであります。

若し私共が、心を虚しうして、よき人の仰せを被れば、白紙に字を書き、空地に家を建てる如くに、念佛の大悲は容易にそこに満ちわたるので『信ずるほかに別の子細なきなり』といふすつきりした、他力自然の、義なきを義とする信海がひらけるのであります。

ところが、久遠このかた、私共の胸の中に自力我慢といふ一物がうづくまつてゐて、念佛申したり、佛を拜むだりすることを、卑しむべきこととさげすんで、何処までも自分の思惑ひとつで貫かうとしてゐるのであります。

然も自分の思惑は一角立派なもの清淨なものの如くに思ひ込んでゐるのでありますが、その夢を佛力によつてゆり覺まして下さるのであります。

維摩経に『香積佛国では言葉は不用で、佛身から放たれる妙香だけで自然に德化を被る。然し釈尊出世の此土の衆生は剛强難化であるから佛は剛强の語をもつて調伏せられる』とも、又『難化之人の心は猿猴に等しいから、譬へば象や馬が荒れる時に鞭をもつて骨に徹るほど打ちこらしめるやうに、佛は心にしみて痛く苦しい限りの言葉をもつて勧化せられる』とあります。

正信偈に『邪見憍慢の悪衆生は、信楽を受持することは甚だもつて難く、難中之難これに過ぎたるはなし』とあります。私は何時もここに参りますとハッと胸打たれるのであります。省みて邪見の身、憍慢の心ならざるは無い私であります。さう云ふものは信ずることは出來難い、これをほど難しいことはないぞと釈尊からつき放されてゐる身を見出すのであります。

又大経の中心、十八願文に『唯五逆と正法を誹謗する者を除く』とあり、そこにも、捨てられる五逆の身、誹謗の死骸同様の身と知らされるのであります。

自分では一角（ヒトカド）立派なものと思ひこんでゐる自力我慢の心が、豈はからんや、邪見、憍慢、五逆、謗法の殘骸、悪鬼の正体なりと経典の明鏡に照し出されるのであり、その者をこそたすけ遂げんとの大悲の至極が、ただ念佛であり、難治難病者のための醍醐の妙薬が南無阿彌陀佛であつたと知らされ『お慈悲の念佛ばかりでたすけられる』との味ひを頂くのであります。そこに『唯』の一字、そのことひとつ、他とならぶことをきらふなりとの聖人の思召をいよいよ渇仰申すことであります。

法藏菩薩の勝行

福島政雄

これからが法藏菩薩の兆載永劫の御修行になります、これを一般には勝行段と呼ばれて居ります。

さて前に申しました三つのお誓の偈文がすみますと

「時に応じて天地が六種に震動す、天より妙華を雨らし以て其の上に散らし、自然の音楽ありて、空中に讃ず」

とあります。これはまことの道といふものは人間の道でありませうが、天地自然と和合する、それは天地自然にさからふものではなく、天地自然と融け合ふ道でなければなりません。人間の深いまことは大地とやはらかにひびき合ひ、大空とも和合してゐる、自然と人間が融合することになるわけであります。

又「天から妙華を雨らす」とあるが、これは法華経にもありますやうに、マンダラ華、マンジユシヤ華などの紅白の華が、天から降り注ぐとありますのは、これはその場に集つてゐる人々の心持がなごやかに、やはらぎ合うてゐることを表現してゐる、美しい表現であります。一座の人の心持が和ぎ合ひ、融け合うてゐるのを示すのであります。

次に「自然の音楽」とあります。これは私共の聞く人間の音楽は、非常にさわがしい音楽が多いやうであります。私にはよく解りませんが、西洋の音楽はことにさわがしいものが多いやうに感じます、その音楽を聞いてゐると、自分の気持がかきたてられるものがあります。それは西洋の音楽でも心持が静かになるものもありますが、大体にさわがしいので、日本の音楽は非常に心を落着けるものが多いやうであります。西洋へ船で行きますとき、印度洋を航海します時に音楽会などをやりますが、大きな海を進む船の中で音楽会を催しますと、日本の音楽はひきたちませんが、西洋の音楽はよく調和する感じがします。その引き立ちませぬ日本音楽も問題でありますが、さわがしい西洋音楽も、どちらもほんとうのものでない、ひき立てる音楽としづめるものとを調和したものがベートベンの第五シンホニイでせう。これは日本で蓄音機で聞いて居りましたが、伯林でも聞きました、それは確かに二つの要素が調和されて居ります、やはらけ、しづめ、引き立てるものを感じます。さう云ふ点ではベートーベンは東洋や西洋を超越して、全人類の耳にかなふ大音楽を作曲して居り、全く音楽の聖であります。

さて経にあります「自然の音楽」とは心を朗らかに引き立てながら、限りなくしづめやはらげる音楽が聞える、人々の心持を朗かに引き立てながら、落ちつけるのでありませう。我々はどうかと云ひますと、朗かであると浮調子になり、しづめますと沈みこみます、この自然の音楽は、その両方が調和されてゐるのであります。

「決定して必ず、無上正覚を成ぜん」

と空中の声がひびくのであります。空中の声とは、私共の心の奥深くひびき渡る声とうけとつてよろしいとおもひます。

「是において、法蔵比丘、斯くの如きの大願を具足し、修満して、誠諦不虚なり。世間に超出して深く寂滅を楽へり」

とあります。斯様に法蔵比丘は大願を缺くるところなく修行し満足せしめて、誠諦不虚、まことのいのちの有様が諦はあきらめるで、つまりすみのすみまで智慧の光がとほつてゐるのであります。まことの世界がひらけて、隅の隅までそのひかりが、智慧の光がとほつて、すこしも虚しいところがないのであります。そして世間に超越して深く寂滅を願へりで、世を超えて、人間の世界のさわがしさが、すべて静まる世界を願つてゐられるのであります。

「阿難、時に彼の比丘、その佛の所、諸天魔梵・龍神八部・大衆の中に於て、斯の弘誓を発し、此の願を建て已りて、一向専志に、妙土を荘厳す」

釈尊ば阿難を呼びかけられて、次の様に説かれて居ります。比丘が諸の天人や、魔や、龍、これは天地間のあらゆる存在の生命をあらはすものであります。その中にあつて広大な願をおこして、これから一向に志を専らにして、微妙の国土を作りなして行かれたと説かれてあります。

「所修の佛国、恢廓広大にして、超勝独妙なり、建立常然にして、無衰無変なり。不可思議兆載永劫に於て、菩薩の無量の徳行を積植し、欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず。欲想、瞋想、害想を起さず、色声、香、味、触、法に著せず、忍力成就して、衆苦を計せず、少欲知足にして、染、恚、痴なく、三昧常寂にして、智慧無碍なり。虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語して、意にさきだちて承問す。勇猛精進にして志願うむこと無く、専ら清白の法を求めて、以て群生を恵利す」

これから建立される国土が、恢廓広大、ひろびろとしてゐる。そして一切の世界に超えすぐれて、独特の大なるところをもつ国土を建立し、無衰無変で、変るところのない国土を建設したいと願はれてゐるのであります。

　つまり我々の世界に、何処何処までも萬物は流転して常住なものはない、この世界の裏付けをされて行くのであります。それがためには不可思議の長い長い間、菩薩のはかることの出來ぬ徳行を積み重ね、植えられるのであります。

　そして欲や怒りや害するといふ心をおこさぬ、欲覚、瞋覚、害覚をおこさず、欲想、瞋想、害想を起さない、いはゆる三毒の煩悩をおこさないのであります。

「色声香味触法に著せず」とは感覚世界に執着しないのであります。我々は三毒の煩悩で心が乱れきつて居りますがこの裏づけをして下さる、その我々の生活の裏付けであります。

「忍力成就して衆苦を計せず」とは、忍耐力が出來上つてゐて、どんな苦しみをも苦しいとは思はぬ。そして「少欲知足にして染恚痴なし」で、欲がすくなく、足ることを知つて、三毒の煩悩はなく「三昧寂静」で、とこしへに静かであつて、それは如何なるものにも碍げられないのであります。そしていつはり、へつらふといふ心は無く、顔色は和らぎ、言葉は愛情がこもり「先意承問」で、向ふの心より先だつて知り、その願ひに応ずるやうなことをして下さるのであります。

「勇猛精進にして志願うむことなく」で、さうした態度は勇ましく、一筋に道にすすみ、倦みつかれるといふことはなく「専ら清白の法を求めて、群生を恵利す」ひたすら清けきもの純粋なものを求めて我々を恵んで下さるのであります。

　ここのところは読むだけでも、何となくよい感じがいたします。これは法蔵比丘が、人間の歴史の歳月の上で、何千年、何億年の前に、斯うしたことをされたのではなく、欲覚や瞋覚や、欲想や害想を起さぬといふのは、今日の我々は、毎日毎日、欲や瞋りや害心にとらへられて苦しんでゐるのであります。その我々を目ざして、何処々々までもそれを離れ融かす働きをして下さるのであります。私を目当にこの修行をなされつつある、私が苦しめば苦しむほど法蔵の修行を痛切に感ずるやうになります。私の苦しみはしれたもので大したものでもないでせうが、自分には大したものと感ずるのであります、さう云ふ感じが強ければ強いほど、兆載永劫の修行が、現に私目当に行はれつつあるといふのが、念佛の感じであります。

斯様に法蔵比丘の物語り、御修行は、人間の過去の物語

でなく、神話でもなく、我々の現実の生活の上に注がれるまことのいのちの働きかけであります。私について離れず働きかけて下さる、そこに称名申すのであります。

「三宝を恭敬し、師長に奉事（ブジ）す。大荘厳を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功徳成就せしむ。空・無相・無願の法に住して、作無く起無し。法は化の如しと観ず、麤言の自害・害彼・彼此倶害を遠離し、善語の自利・利人・人我兼利を修習す」

　これは、三宝を敬ひ、師匠や長者にうやうやしくつかへ「大荘厳」とは身の行ひのかざりでありませう、身によき行の荘厳を備へてゐて、諸々の衆生に功徳を成就せしめる即ち佛のまことの働きが私にひびいて來ることによつて、我々をして功徳を成就せしめ給ふのであります。

　かくて一切のものに執着せず、願ふべき世界も無いといふ世界に住し「作無く、起無し」で、自分は衆生のために働いてゐるぞ、今からやるぞといふ、さう云ふことがないのであります。法蔵菩薩の働きは何時とは知らん、自然にしみとほつて來る、腹にしみる。今からやつてやるぞ、始めるといふのでなく、無限の時間をとほして、時間全体を貫いて、歴史的時間を超越して、過去とか、未來とか、現在といふ歴史的時間を貫いて、これを絶して、永遠の現在といふところで、佛のまことがひびいて來るのであります。そこにはわざとらしい始めもなく、作もなしで「法はすべての仮の如しと感ずる」換言すれば、ここにまことの道ありと出して示すやうなものがないので、さうした境界から出る言葉は、そのままに自害害彼をはるかに離れ、善語の自利利人、人我兼利の徳をおさめられるのであります。

「国を棄（ス）て、王を損（ス）て、財色を絶去（ゼッコ）して、自ら六波羅密を行じ、人を教へて行ぜしむ」

「国を捨て王を損て」とは、前の菩薩の徳を讃歎されたところにもあります。これは釈尊が、国王をすて、財物をすてて修行せられたところから出て來るのであります。

　さて「国を棄て」といふ昧ひを申しませう。たとへば日本の天皇が、国を棄て位をすてて、何処かへ行かれることではないでせう。天皇の御位にありながら、日本国にありながら、国をすて王をすて、となるのであります。

　戦争以前、そして戦争中に、これを読みますと、青年には不満でありまして、日本にこんなことがあつてはならないと、新京で喰つてかかりました。終戦の今日の日本国になつて來ますと、はつきり解ることであります。

　佛法が聖徳太子によりまして日本に入つて來ましてから

天皇や皇族が帰依され、出家された方が多いのが解るのであります。日本の歴史に限つて見ますと、日本の歴史は昔から今日まで、日本の国民の何者かが権力を握つて、上に天皇を戴くか、むしろ天皇や皇族の方々を自分の権力の道具に使つてゐるのであります。

聖徳太子の頃は物部、蘇我がさうであり、奈良時代、平安時代には藤原氏、武家時代にもさうでありました。

明治以來、天皇の大権といひましたが、その実は権臣や閥族が天皇を傘にきて自分達の我欲をみたしてゐるのであります。日本が立派な国で、天皇の御稜威の下にあつたのではなく、我欲をみたす道具に用ひられてゐる。天皇機関説などの論議がやかましくせられたこともありますが、現実の狀態は、天皇を機関として続いて居ります。

斯うした狀態でありますから、歴代の天皇や皇族方の上から申せば、大乗精神にまで触れないと、御心が落着かれない、天下の事を思はれても思ふやうにはならなで、障害だらけであつたと思ひます。さうすると実際国を棄て王を捐て、御位にありながら虚位にあるといふ狀態で、国民のためとお考へになつても御心がとほらない、権臣閥族、それに似たものがありまして、天皇を自分のもの顔にして居る、宮内省の官吏にはさうした者も居りました。そこで天皇は何ともいへぬ苦しみをもたれてゐたのであります。その苦しみの解決は大乗佛教以外に徹底した解決法はないのであります。さうでありますから御位にあり乍ら国をすて王位をすて、財色をたちさられるのであります。さういふところは支那の歴史などとくらべますとよく解るのでありますが、日本には未だかつて殷の紂王（インチユウオウ）や、夏の桀王（ケツオウ）といふやうなひどい王が出られたためしが無い、武烈天皇紀はひどいことが書いてありますが、これはつくり事であつて、こんなことがあるはづがありません。これは朝鮮のある王を悪く云ふために書いたものが武烈天皇紀に混入したものでありませう。殷の紂王が油を塗つた棒の上を罪人に渡らし、火の中におとすといふ様なことをして、自分の気に入つた美人に見物させたといふのであります。さういふことは日本の歴史には無いので、むしろ天皇や皇族は苦しんで居られる、さうでありますから歴代の天皇が出家せられるのがよくわかるのであります。

長い間、表面は形式的に持ち上げ、最近は左翼的な考へを持ち、マルクス流の歴史の考へ方で見て居ります。持ち挙げすぎた右翼の考へは、その底に自分達のために利用するのでありますが、唯物論的な観点に立つて見ることもまた間違ひであります。

権臣閥族が天皇を苦しめてゐたので、天皇は佛教によつて心の和を求め、この上から日本を見て居られたのであり

ます。斯う考へますと「国を棄て、王を捐て」が、日本にあたつてゐるのであります。今頃はなほ更らよく当つてゐると思ひます。皇室と佛教と云ふ本を著された方もありますが、皇室と佛教とは内面的に密接であり、またさうならざるを得なかつたのであります。そこで「国を棄て、王を捐てる」といふことによつて、よい誠の道がひらけて來たのであります。

聖徳太子も亦、太子の御位にありながら「国を棄て、王を捐て、財色を絶去して、自ら六度を行ずる云々」の精神から国を治められて居ります。当時蘇我氏がどうにも太子の思ふやうにならぬといふことがあつたでせうから、内面的にこの精神が続けられて居たことでありませう。

「無央数劫に、功を積み、徳を累ね、其の生処に随ふ。意の所欲に在り、無量の宝蔵自然に発応し、無数の衆生を教化し安立して、無上正直道に住せしむ」

何ともいへぬ長い間、功を積み徳を重ねて行かれ、数限りのない宝蔵が自然にあらはれ、沢山の衆生を佛道に安立させられるのであります。

「或は長者・居士・豪姓・尊貴と為り、或は刹利・国君・転輪聖帝となり、或ば六欲天主乃至梵王と為り、常に四事を以て一切の諸佛を供養し恭敬す。是の如きの功徳称説すべからず」

次に思ふままの国に生れて行かれる。そこには無量の宝蔵があらはれて、衆生をまことの道に安立せしめられる。長者や居士、バラモン、貴い身分、武士とか国君、転輪聖王、六欲天の主となつたり、梵王となられて、四事（衣食住薬）をそなへて、一切の諸佛を供養せられる。また種々の姿で一切諸佛を供養し、一切衆生をまことの道に導かれて行くのであります。

「口気香潔にしてウパラ華の如し。身の諸の毛孔、栴檀香を出す。其の香、普く無量の世界に薫ず」

口の息が香ばしく、青蓮華の感じがする、そればかりでなく、諸々の毛孔から栴檀の香りが出で、これが無量の世界に薫じ、何ともいへぬ徳香がするのであります。

「容色端正にして、相好殊妙なり。其の手常に無尽の宝衣服・飯食・珍妙の香華、繒蓋・幢旛の荘厳の具を出す。是の如き等の事、諸の天人に超え、一切の法に於て自在を得たり」

顔色が正しく、顔貌がすぐれてゐて、その手は無尽の宝衣・食・香・幢・蓋などを出すとありますが、これは精神的救済が物質的救済に伴ふことを教へられます。物を与へることと、まことの道を教へられるのと離れてゐないのであります。私共は経済的に生活をととのへると同時に、法蔵の教を身にうけない限りは、大経の教は身についたものとならぬ。飲んだり食うたりして暮すだけでは、佛のまことがとほつたとはならぬのであります。

編集後記

八月六日は常音先生の御一週忌に当ります。誠に無限の寂寥を覚えますのは私一人ではありますまい。然しさうした淋しさの中に、いよ〳〵宝林檀上よりの還相の照り返しを強く頂き、恩徳を謝しまつて居ります。

最近の西博氏の御書面によりますと、先生の御遺稿が、日記、筆録、書簡の順に編集されつつあります由、先生の胸裏に深く湛えて居て下さつた実語眞言が、皆様のお骨折りによりましてやがて拝読させて頂けますことは何といふ有り難いことでありませうか。

本月号は、在せし日の御面影の片鱗として御法話の筆録を掲げさせて頂きました。昭和廿四年の秋で、善照寺の広い本堂で淳々と集る者の心に泌みとほる御講話であります。同聞衆の中に那須野千鶴子様や善照寺の母堂様はすでに遷化せられました。宿痾の私をお浄土から無限の慈悲のみ手をのべて哀愍下さることでありませう。

○

△法蔵菩薩の勝行は四十八願の誓ひを終り、重ねての誓ひを表白された法蔵菩薩の本願成就の御辛労について綿密な法味を頂きました。福島先生は八月十日頃に蒲郡の多田鼎師の追弔会に出席せられ、御都合よろしければ拙庵で御講話頂ける予定であります。

△『よき人の仰せの極み』の原稿は最近の私の身心にひびく徳音でありまして、そのまま発表いたしました。ただ念佛のまことひとつに、そらごとたわごとまことあることなき身を照し出され、また層一層にまことなる大悲の念佛を仰ぐ次第であります。

○福島先生の四十八願の御信味の中で『光明無量』の願意について、それは私自身があらゆる衆生の中で佛様に一番遠い処に居るから、その一番遠い私の上にまで光明を与へずばやまじとの悲心から『光明はかりがたからん』とお誓ひ下さるのである、とのことでありました。一切の願意を親鸞一人がためなりけりと信受せられる祖聖の御意にピツタリと相応される道味であります。同様に『ただ念佛のみぞまこと』の名告りの中に、この大悲をのけて救ひの道は全く無き身と信知せしめられます。

○これと同時に『求道学舎では宗派を超越して念佛を聞いて貰うてゐる。それは念佛以外に我等如き凡夫の救済はあり得ないからだ』との近角先生の御言葉は、極く軽く申して居られますが、然しこれは大変なことを申されて居るので、今更に驚歎の外はありません。これこそ『ただ念佛のみぞまこと』の絶対不二に徹し給ふところから自然に流出された御述懐であります。

聚　墨　生

昭和二十九年七月十日印刷
昭和二十九年七月十五日発行
毎月一回十五日発行

定価　一部　十七円（郵税共）
半年　百円（郵税共）
一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番